

論文要約

本論文の構成

本論文は、全9章で4部構成になっている。まず、第I部第1章、第2章でロールシャッハ法及び「なぐり描き (Mess Painting)」法を通して見た「自我のための退行」に関する本研究の問題、目的を明らかにした。そして、第II部第3章から第5章まではロールシャッハ法を用いた芸術家(美大生)を対象とした「自我のための退行」に関する心理臨床学的研究である。第III部第6章から第8章までは、Luthe, W. (1976)が開発した「なぐり描き (Mess Painting)」法を一般青年、美術専攻大学院生に施行し、その効果を「自我のための退行」という観点から検討した心理臨床学的研究である。そして、第IV部最終章で、ロールシャッハ法、「なぐり描き (Mess Painting)」法を通して見た、「自我のための退行」に関して、全体的・統合的視点から考察し、本研究全体を俯瞰した。以上が本論文の構成である。

第1章 問題 I

Freud, S. (1922)は、芸術家の精神力動のあり方に触れ、次のように述べている。「芸術家は、あまりにも強い本能的欲求に駆り立てられるのであるが、これらを満足させ得る現実的手段が欠けている。そこで芸術家は、現実を見捨ててその関心のすべてを空想生活の願望形成に転移する。ひょっとするとこの道は神経症に通じているかもしれない。・・・おそらく彼等の体質は、昇華への強い能力と、葛藤を決定する『抑圧の一定の弱さ(Lockerheit)』とを含んでいる。ところが芸術家は、このような空想の願望形成から現実へ復帰する道を有している」。Freud, S.は、芸術家の抑圧の弱さを、神経症者と共通の特徴として述べ、自我の弱さの表れとしてみている。英訳では、この”Lockerheit”が”flexibility”(柔軟性)という言葉に置き換えられているが、Kris, E. (1952)は、この抑圧の柔軟性という概念を積極的にとりあげ、創造的な、自我の強さを示すあり方としてとらえ直した。そして、この抑圧の柔軟性が条件となって二次過程から一次過程への「自我のための退行(regression in the service of the ego:以下RISEと略)」が生じるとした。ここで言う一次過程、二次過程とは、Freud, S. (1900)の概念だが、一次過程は「無意識的なイドにおける現象を支配している過程」で、本能衝動に密接に関連した原始的不合理な思考であり、置き換え、圧縮、象徴的表現などの機制に従う。また、二次過程は「前意識、自我における現象を支配している過程」であり、衝動エネルギーの制御と拘束が行われる。覚醒思考、注意、判断、推論、といった現実在即した論理的な心理機能は、この二次過程に属する。そして、一次過程が支配的になる状態を退行と呼ぶ。Kris, E. (1952)は、自我の統制下にある一次過程への退行という概念を創出し、退行の持つ創造的な側面に始めて目を向けた。

Kris, E.の退行理論を更に精緻化したのがSchafer, R. (1958)であり、彼は、RISEを次のように定義した。「一次過程やその派生物が、意識的経験の中にある場所を与えられている限りに於いて、それを退行と呼び、その退行が自我の興味(創造的・共感的な)のために役立つ

ち、比較的簡単に立ち戻ることができ、適応的な退行という観点から、生産的な仕事へと従う場合を、『自我のための』と呼ぶ。」この定義からも分かるように、Schafer,R.は、創作過程の説明として用いられたRISEを、より広い適応的なプロセス全般に働く、適応的な創造的退行ととらえ直したのであった。Schafer,R.は更に、RISEを、ロールシャッハ・テストのテスト過程と結び付けて、投影法を用いて、RISEを測定する道を開いた。

そして、RISEを二次過程から一次過程への退行と考える立場から、ロールシャッハ・テスト独自のスコアリング方法を考え出したのが、Holt,R.(1977)である。彼は、Freud,S.の一次過程、二次過程を測定するカテゴリーを考える上で、1) 内容面の一次過程と二次過程、2) 形式面での一次過程と二次過程、3) コントロールと防衛、の三つを強調した。1) は衝動の内容を指し、衝動が中和されていないほど、反応に現れた思考の内容は一次過程寄りになる。内容面のカテゴリーはそこに表されている衝動に応じて、①性的目標をもったもの、②攻撃的目標をもったもの、の二つに分類される。衝動が生そのまま出される場合はlevel1（より一次過程と密接にかかわる：以下level1と略）が、修正され受け入れやすい形で出される場合はlevel2（より二次過程と密接にかかわる：以下level2と略）がスコアされる。2) は、思考の形式を指す。反応に示された思考形式が、二次過程を特徴づける、現実との経験に根ざした秩序だった論理的思考とどれだけ離れているか、どれだけ夢のなかのような凝縮、置き換え、象徴化がそこで生じているか、が重要になる。形式面のカテゴリーは、圧縮、置き換え、象徴反応、矛盾反応、言語表現、その他の知覚や思考の歪み、の六つに分かれ、それぞれサブカテゴリーがあり、level1、level2の段階がつけられている。また、退行が自我のための適応的なものになるためには、3) のコントロールと防衛という要因が大事になってくる。一次過程、二次過程の評価をするときには、被検者の反応に対する態度（快、不快など）と、思考に含まれる一次過程に支配される程度、あるいはそれを支配、防衛する程度が問題になってくる。コントロールと防衛のカテゴリーは五つに分かれ、それぞれサブカテゴリーがある。

Holt,R.のスコアリング基準を用いた芸術家（美大生）を対象にした研究としては、数多くあるが、優れた芸術家はより多くの一次過程を出すという点では一致しているが、コントロールに関しては、一致した結果が出ていない。これは、対象にした芸術家の種類（画家、彫刻家、建築家など）、芸術家の評価の基準の違い等など、複雑な要因が関わっていると考えられる。

又、先行研究では、芸術の主要ジャンルである絵画を製作する画家のロールシャッハ・テストを用いて画家の退行の様相を詳しく扱ったものはない。また、画家のロールシャッハ・テストをその作品世界と関連付けた研究もない。そこで本研究では、画家（美大院生）を取り上げ、画家（美大院生）の退行の特徴を、一般大学生との比較、スタイルによる画家の退行の違い、一人の画家における退行の変遷と作品の変化との関連性を検討することによって、画家（美大院生）の「自我のための退行」の有り様を詳細に検討することを目的とする。

第2章 問題Ⅱ

適応的な働きをする「自我のための退行」だが、どのようにしたら「自我のための退行」を促進することができるのか、ということについては論じられてこなかった。著者は、カナダの心理学者 Luthe, W. (1976) が創造性を開発する技法として創案した「なぐり描き (Mess Painting)」法を、「自我のための退行」を促進する技法として再定義し、本研究を行った。

「なぐり描き (Mess Painting)」法 (以下、MP 法と略) は、カナダの心理学者 Luthe, W. (1976) が開発した技法である。なぐり描きを用いて人の心理的成長を引き起こす事を目指している。以下、「セッション」という言葉を使うが、セッションとは調査協力者がなぐり描き専用の部屋に来て、自由ななぐり描きを行う約 1 時間の作業のことを指す。

①絵の具と筆を用意し、新聞紙にできるだけ大きく何も考えずになぐり描きをする。約 2 分間で新聞紙 2 ページ大の 80% 位を埋めるようにする。それを 1 セッションで 15 枚描く。②1 週間にそのセッションを 4 回行う。従って 1 週間で 60 枚のなぐり描きをすることになる。③それを 6 週間継続する。従って、トータルで 360 枚のなぐり描きをすることになる。④3 週目からなぐり描きの延長上で、自分が描きたいと思った要素を少しずつ入れていく (Luthe, W. はこれを自己進化的描画と呼んでいる)。自己進化的描画を描く際には、最初からこういうものを描こうと思わず、なぐり描きをしながら心の中に自然に出てくるイメージに従って描く。第 3 週では、自由ななぐり描きを 10 枚描いた後に、1 枚だけ自己進化的描画を描いてもらい、その後、5 枚自由ななぐり描きを描いてもらう。⑤第 4 週では、10 枚自由ななぐり描きを描いた後で、自己進化的描画を 1 枚、さらに自由ななぐり描きを 5 枚描いた後で、自己進化的描画を 1 枚描いてもらう。⑥第 5 週以降は、〈自由ななぐり描き 5 枚 + 自己進化的描画 1 枚〉を 1 セッションで 3 回繰り返してもらう。⑦自己進化的描画の合計枚数は、第 3 週 (1 枚 × 4 セッション) + 第 4 週 (2 枚 × 4 セッション) + 第 5 週から第 6 週 (3 枚 × 4 セッション × 2 週) = 36 枚ということになる。⑧週 1 回 2 時間程度、セッションとは別に時間をとって面接を行う。面接では、なぐり描きのやり方に関する質疑応答、1 週間での心理的変化や自己進化的描画についての話し合いを行った (以下、セッションは S. と略)。

以上の手続きから分かるように、MP 法は、①なぐり描きの段階②自己進化的描画の段階③面接の段階に分けられる。①では意識的な計らいを捨て、出来る限り何も考えずになぐり描き (以下、「自由ななぐり描き」とする) を行う。それを繰り返す事によって、描画中の自我の統制は弱くなり、現実的合理的思考からの離脱、抑圧の低下、意識水準の低下などが生じる。そのような状態の中で、眼前の色彩にも刺激され、普段は余り意識に上ってこない心的素材に触れ易くなる。②では、そうやって近づいた心的素材を描画を通じて表現する。その時に重要なのは、浮かんできたイメージを、超自我の検閲や自我の防衛による加工を避けて、そのまま定着する事である。この①と②は合わせて、Kris, E. (1952) の言う RISE を人為的に引き起こす段階だと考えられる。

第3章 美術専攻大学院生の「自我のための退行」について

対象者を美術専攻大学院生と一般大学生として調査を行い、美術専攻大学院生の自我機能を、RISEの観点から検討することを目的とした。具体的には、両群のRISEの様相を比較するため、ロールシャッハ・テストを用い、Holt,R.(1977)に従って分析した。その上で、両群での①一次過程的反応の量的比較、②従来検討されていなかったサブカテゴリーの比較、③一次過程的反応に加えられたコントロールと防衛の比較を行い、美術専攻大学院生のRISEの様相を細かい点で明らかにした。

結果は、美術専攻大学院生は、一般大学生より一次過程的内容が多いという従来の研究結果がまず確認された。また、美術専攻大学院生では、一次過程的内容を含む反応の方が、そうでない反応より形態水準が高いことが分かった。創造群の方が一次過程的内容にコミットし、反応の産出の際に推敲を加えるということだが、本研究では、同じ美術専攻大学院生の中でも、一次過程的内容を含む反応に対してコミットし、反応を現実に合わせて明細化し、コントロールを効かせることが分かった。この点からすると、一次過程的内容への退行は形態水準の増大という生産的結果をもたらすと考えられる。

更に、C-co1、C1、Sym1というlevel1の形式が多いという点も明らかにすることができた。それらの形式は、画家に特徴的なものの見方に関わるのが、作品との関連の中で明らかにすることもできた。

第4章 抽象画家の「自我のための退行」の有り様について～具象画家と比較して

第4章の目的は、抽象画家と具象画家という作品のスタイルの違いによってRISEのありようが違うのかを比較検討することであった。

結果は、level1の形式のうち、C-co1、C1、Sym1、S-R1、AuE11、level1の総反応数で両群に差が見られた。各々のlevel1の形式を詳しく分析したところ、各level1の形式が、抽象画家の作品、方法論と密接なつながりがあることが分かった。中でもAuE11は、抽象画家の作品世界と深くつながっていることが見いだされたことは本研究の特筆すべき新しい知見である。

本章も第3章と同じように、抽象画家に特徴的だったlevel1の形式の反応を抽象画家の作品、方法論と結びつけて考察しており、反応と作品を結び付けたという点で、第4章の目的も十分に明らかにできたと言える。

第5章 芸術家・中西學氏の作品の変容と心理的変容との関連について

第5章の目的は、一芸術家の20年の「自我のための退行」の変化の検討を行い、その変化が作品世界の変化とどのように関連しているのかを詳細に検討することであった。対象として、画家 中西 學 氏にご協力頂き、長期間に渡ってRISEの有り様がどのように異なるのかを、作品の変化と関連付けて検討した。結果は、作品は20年を経ることによって、より原初的、根源的なものを志向するようになり、ロールシャッハ・テストは、20年前と

比べて、level1 の形式の反応が顕著に増大し、より退行的になっていることが分かった。増大した level1 の形式のカテゴリーに関して、インタビューを通して、氏の創作活動、創作の姿勢との関りが考察された。その結果、level1 の形式の反応の増大と創作との関連性が明らかになった。すなわち、作品自体も、20 年前と比べてより退行的なものとなり、それがロールシャッハ・テストにおける一次過程的反応の増大と関わっていることが推測された。本研究では、より詳細に作品とロールシャッハ・テストの level1 の形式の反応との関連性が検討された。一人の画家のロールシャッハ・テストと作品との関係がこのように詳しく検討されたのは初めてであり、本研究の成果と言える。

第6章 「なぐり描き(Mess Painting)」法の5つの事例研究 (Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん)

第6章を通じて、MP法がRISE促進作用を持つこと、特に(1)意識化されていなかった感情の体験 (2)自己像との出会い (3)心の奥にあるエネルギーへの接近 (4)意識レベルの硬直した思考の枠組みが緩むこと という4つの視点からMP法によるRISE促進作用を説明することができた。

まず(1)についてだが、Jung,C.G.(1928)は「退行によって活性化された無意識的内容はまだ未分化な、太古的な、未発達な形であるにせよ失われた感情機能を含んでいる」と述べており、退行によって、無意識レベルにあった感情機能が活性化されるとしている。Bさんの場合は、攻撃的感情、不安感、安心感、Dさんは、不安、寂しさ、孤独感など、協力者各人が抱えている人生の課題に関わる感情を意識化することになった。

(2)については、Cさんは、「しんどい」自分や「しなやかに生きている」自分など様々な自己像に出会った。Eさんは、「苦悶する」自己像、今までの悪循環を断ち切る新たな自己像に出会った。以上のように、自己像に出会うと言っても、どのような自己像にどのように出会うかは人それぞれであり、人のこころの多様さ、複雑さを確認する結果となった。

(3)については、Bさんは、「動き」のイメージを通じて生き生きとしたこころのエネルギーを表現し、さらに「書道」のイメージで何物にも束縛されない自由なエネルギーに触れることになった。Dさんは、「金の卵」「植物のイメージ」「山・雲・草」「生命・生殖」など様々な生命のイメージを描き、それらのイメージがDさんの心的エネルギーを賦活したようであった。以上のように、(3)に関しても、心的エネルギーへの接近の仕方は人それぞれであり、様々な形で「心の奥にあるエネルギーへの接近」が生じることが分かった。

(4)については、Cさんは、「理屈」「頭で考えてしまう」という言葉で表されるような硬直した思考の枠組みが緩んできたことを語っている。Eさんは、「映画の見方が変わった。それまでは概念化して見ていたが、細部の所に感動する事が多くなった」と述べ、知的な枠組みから映画を見ていたのが、その枠組みから外れたところから映画を見れるようになったことが分かる。以上のように、ほとんどの協力者が(4)意識レベルの硬直した思考の枠組みが緩むこと、について自分なりの言葉で語っている。

第7章 「なぐり描き (Mess Painting)」法の退行促進作用がポジティブに作用しなかった一般群・事例研究 F

本章では、本法がポジティブな効果をもたらさなかった事例を取り上げ、本法の RISE 促進作用がうまく働かない時のプロセスやメカニズムを考え、MP 法のより深い理解に役立てることを目的とする。

F さんの場合も、4つの視点から MP 法の RISE 促進作用について検討することができたが、それ以外の点で、F さんに特徴的であったのは、自由な「なぐり描き」段階の退行状態では、最後まで寂しい感じや不安感が消えなかった点である。F さんは、自分で認めたくない「寂しい」という感情に、MP 法を通じて、思いがけず直面させられた。この感情は最後まで消えなかったが、恐らくこれは F さんの生育史にまつわるかなり根の深い感情だと考えられる。それに適切に触れることは、F さんの心の幅を広げることに役立ったかもしれないが、調査者はその「寂しさ」を受け止めきれず、結果的にかなり心理的なつらさを F さんに強いることになってしまったと考えられる。そのため、F さんには MP 法のつらい面が強く印象づけられたのかもしれない。

F さんの事例から分かるように、この技法は受け入れる準備のない心的内容を意識化する可能性があるため、かなり強く否定的な心的素材が抑圧されている対象者、ネガティブな感情が抑圧を緩めるとすぐに意識化されてしまうような対象者（すなわち、健康な防衛が働きにくい対象者）の適応には慎重になる必要があるだろう。また、F さんのような場合、面接場面でどのように支えていくかが重要になってくると思われる。

第8章 「なぐり描き (Mess Painting)」法が及ぼすイメージの変容および退行促進作用について—美術専攻大学院生の事例を通じて

第8章を通じて、MP 法が美術専攻大学院に対しても RISE 促進作用を持つこと、特に6章で明らかになった(1)意識化されていなかった感情の体験 (2)自己像との出会い (3)心の奥にあるエネルギーへの接近 (4)意識レベルの硬直した思考の枠組みが緩むことという4つの視点から MP 法による RISE 促進作用を説明することができた。

まず(1)についてだが、G さんは、嫌悪感、H さんは、感情そのものではなかったが感情とつながっている深層のイメージなど、協力者各人が抱いている人生の課題に関わる感情を意識化することになった。

(2)については、G さんは、自己像の変容に向き合い、理想の自己像に出会うことができた。I さんは、「より深く自分としゃべっている感じ」とより無意識的な自己像と出会い、或いは自分の中の「他者」に出会うという形で新たな自己像に出会うという体験をした。

(3)については、G さんは、トラウマティックだった元上司に対する感情を自己進化的描画を通じて表現したあとで、活動欲が出てきて、エネルギーが出てきたと語っている。H

さんは、充実感という表現で心的エネルギーが回復してきたことを語っている。

(4)については、Hさんは、「頭で考えずに手が動いていくのがいい。」と手が勝手に動いて絵が描けるようになったことを語っている。これこそまさに、思考の枠組みを超えて無意識内容が表現されるということである。Iさんは、「色に呼ばれて形が出てきて、形に呼ばれて色が出てきて・・・考えて組み立てていったというより、必然的にこうだという感じが出てきた」と述べており、Iさんの場合も思考ではなく必然的な無意識の心的流れに従ってイメージが生まれるようになったことが分かる。

以上、MP法は、4つの点で、RISEを促進することが示されたが、これらの作用はJung,C.G(1928)の言う「退行は魂という内的世界に適応する必要性を引き出す」という言葉に包括されていると言ってもいいかもしれない。MP法の4つの作用によって、調査協力者はそれぞれが自らの「魂」にわずかながらも触れたと言うこともできるだろう。

MP法の前後にロールシャッハ・テストを実施した。

Gさんの場合は、一次過程的反応が若干減ったが、反応の中身を検討した結果、初回より、より深い退行が生じている可能性も考えられた一方で、より現実的二次過程の方向性への変化も見られ、2つの方向性が見られた。

Hさんの場合は、一次過程的反応数が倍増し、MP法施行前より、退行しやすくなったことが分かった。ただ、形態水準は1回目、2回目ともに平均値が0.5であり、コントロール要因も、2回目で8個中2個と少なく、自らコントロールしながら退行するようになった、と結論づけるのは難しいことが考察された。

Iさんの場合は、一次過程的反応が増えており、退行しやすくなっていることが分かった。平均形態水準は、2.7と高くRISEが生じたと言えるだろう。

以上の結果から分かるように、MP法のRISE促進作用は、コントロールされた一次過程的反応を増大させるというような単純な結果をもたらすのではなく、調査協力者によって異なった結果を示し、複雑な要因が関わっていることが予測された。

第9章 総合考察

本論文では、「自我のための退行」をロールシャッハ法及びMP法を通して検討した。第II部では、芸術家(美大生)のRISEがロールシャッハ・テストにどのように反映されるかを作品も参考にしながら検討した。その結果、従来言及されてこなかったlevel1の形式に関わる反応での差異が、一般大学生と美大生、抽象画家と具象画家の間に見られた。また、画家の作品とロールシャッハ・テストの一次過程的反応との関係も見出すことができた。

第III部では、MP法を「自我のための退行」を促進する技法として、そのRISE促進作用をロールシャッハ・テストの変化を含めて、検討した。その結果、MP法には、(1)意識化されていなかった感情の体験 (2)自己像との出会い (3)心の奥にあるエネルギーへの接近 (4)意識レベルの硬直した思考の枠組みが緩むこと、の4つの心理的効果があることが見いだされた。また、MP法によって引き起こされるロールシャッハ・テストの結

果から、ロールシャッハ・テストに示される RISE の変化の有りようは、各人各様であり、様々な要因が関わっていることが推測された。

本研究では、今までに得られなかった知見が得られたと同時に、様々な芸術家（美大生）の一次過程的反応と作品とのより詳しい検討が必要であることが示唆された。また、MP 法の効果に関して、ロールシャッハ・テストを用いて、更に、事例研究的に、個別にどのような変化が生じるのか、また、臨床事例に用いて、MP 法の有効性を検討する必要性が示唆された。